



TITLE:

きらめく動物たちの命と海:久保田  
信の白浜だより(その35)

AUTHOR(S):

久保田, 信

---

CITATION:

久保田, 信. きらめく動物たちの命と海:久保田信の白浜だより(その35). うみひろも 2012, 109: 16-18

ISSUE DATE:

2012-11-16

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/180257>

RIGHT:

© 海の生き物を守る会

# 5. きらめく動物たちの命と海 【久保田信の白浜だより(その35)】

## イボクラゲの来遊

和歌山県田辺湾へ来遊するクラゲの中で最大のクラゲがイボクラゲである。一度きり 1 個体しか来なかったエチゼンクラゲは例外なので、対象から除いている。

## 田辺湾で見られる最大のクラゲ

私自身の目でこれまで観察できた大型クラゲの一つが、田辺湾の阪田で採集したイボクラゲだ。京都大学瀬戸臨海実験所へ赴任してきたばかりの頃の 1993 年の冬季に、1 個体を網ですくい揚げたが、両腕でかかえるほど大きく、数十 Kg もある巨体で重かった。色が美しく、目の覚めるような青い傘をもった雌だった。茶色で複雑な口腕に保育しているプラヌラ幼生が多数採取できた。

狭いケースへしか収容できなかったため、この巨大なイボクラゲは長生きせず、たった 1 週間ほどで昇天してしまった。死亡確認の際に、人生初の「クラゲ腐臭」をかいだ。小型のヒドロクラゲ類だと、寿命が尽きると 1 日もあれば体は溶け去り、海水にすっかり混じってしまう。死体は全く残らないで、海のすまし汁になる。しかし、この大型クラゲは実に臭かった！

この雌のイボクラゲからプラヌラ幼生を採取し、それからポリプを多数つくって水族館で年中お見せするはずだった。だが、プラヌラはポリプになかなか出来なかった。色々な材質のものに付着させようと試みたが、拒否されてしまった。ある魔法の薬をふりかければどんなクラゲでも変態を起こさせられるのだが、自然にポリプをつくりたかった。

しかし、わずかばかりのプラヌラが定着し、ポリプになりかけていた。ところが、再びプラヌラにもどって泳ぎ出してしまった！ これは「ベニクラゲの若返り」に通ずる現象なのかもしれない。刺胞動物の融通性は果てしなく大きい。夢のような研究の材料が多々存在するのだ。

その後、北浜でもクラゲ腐臭をかいた。海表面を漂う青色のギンカクラゲの大量漂着の時である。北風が“北浜”へ運ぶ臭いに思わず鼻をつまんだ。イボクラゲと比べると直径数 cm と小さなクラゲだが、それでも大量に死ねば、腐ったら大型動物の死体と同じ臭いがするのだと改めて実感した。

## 田辺湾へのイボクラゲの出現

大型のイボクラゲは、わが国の太平洋岸で稀に出現し、傘の直径が 50cm に達する。傘の頂端に顕著なイボ状の突起が多数密集した塊となっているのが特徴である。ここが和名の由来となったのだが、その機能は不明である。この大形クラゲが、どこでどう発生しているのか謎である。イボクラゲは外洋性で熱帯性起源だと推察されるが、足しげく通った南西諸島で一度も遭遇したことがない。田辺湾周辺海域で遭遇する機会もめったにない。

田辺湾でのイボクラゲの来遊記録は、1993 年以降わずかしかない。上記のように 1993 年 12 月 5 日に阪田で初めて 1 個体を捕獲した。無傷で、傘の直径が 45cm もあり、本種の最大の大きさに近かった。その 3 日後の 12 月 8 日に、瀬戸臨海実験所北浜の洞門に漂着した 1 個体を職員の職員が発見した。この個体も大きく、直径 30cm もあった。その翌年も同じ月に 3 個体目が（12 月 8 日）、最初の個体発見と同地点（阪田）を浮遊していた。1994 年 11 月と 2002 年 10 月にも 1 個体ずつを職員が発見し、何れも直径 30cm 前後のサイズであった。

この他、田辺市の隣町である南部町の堺漁港の刺網に、2001 年 2 月と 2003 年 12 月にイボクラゲがかかっていたのを元職員の方が発見した。それらの傘の直径が 21cm と 26cm であった。2005 年 9 月 13 日に実験所の“北浜”に直径 28cm の 1 個体が漂着した。2007 年 11 月に近畿大学白浜種苗センター職員が職場近くで、2009 年も 11 月に同センター職員が大蛇島近くで大型個体を捕獲した。

以上のように、イボクラゲは冬季に少数が発見される程度である。田辺湾産のプランクトン相をまとめられた故山路勇先生による 1958 年公表の論文でも、本種がその頃もたいへん稀だと記されている。外洋性のイボクラゲが、いかに冬季が強風と波浪が高くても田辺湾まで運ばれて来ることは、そう頻繁にはおこらないのだろう。

## イボクラゲの生活史

故杉浦靖男先生が神奈川県三崎で採集した雌からプラヌラ幼生を取り出し、実験室でポリプに育てて、イボクラゲの生活史を解明されている。ポリプからは若いクラゲであるエフィラを遊離させることにも成功し、クラゲをしばらく飼育して成長過程を調べておられる。同じ鉢クラゲ類でよく知られたミズクラゲやアカクラゲが、1 個体のポリプから多数のエフィラをつくるのと違って、イボクラゲはたった 1 個体のエフィラしか一度につくらない。クローンづくりの効率が悪いといえよう。それだから個体数もあまり多くないのであろう。



図. 和歌山県田辺湾に  
2007年11月21日に出現したイボクラゲ